



URL <https://kanagawanet.org/>

こどもの命を真ん中に

大阪市西成区にある「こどもの里」を訪問し、荘保恭子館長に話しを伺いました。

内川由喜子(厚木市民自治をめぐす会)



子ども保育を開設した時、未就学のきょうだいを連れてきたり、お姉ちゃんが赤ちゃんをおぶってきたり、制度内の学童年齢だけでなく、誰でも受け入れる形になりました。また、夜間も働く介護職など親の仕事都合や、虐待など行き場のない子どもたちが寝泊まりできる緊急避難場所も開設してきました。大人の都合で子どもの生活の場を変えてしまうのではなく、常に子どもの権利を守り、子どものいのちを真ん中に置いた活動を続けています。こどもの里

誰でも受け入れる

こどもの里は1977年「ふるさとの家」の一室で子どもたちの遊び場として開設されたことが始まりです。西成の子どもの目がキラキラと輝き、澄んだ目をしていることに惹かれ、活動を進めながら、子どもとその親たちの生活のしんどさ、困難な状況が生み出す子どもたちのニーズから活動を広げています。現在は、留守家庭児童対策事業(学童保育)・地域子育て支援拠点事業(つどいの広場)・小規模住居型児童養育寮(ファミリーホーム)・児童自立支援援助事業(自立援助ホーム)・自主事業(緊急一時保護、宿泊所、子ども夜回り、ステップハウス事業など)を行っています。

ネットワーキングを生かして

西成区では、要保護児童対策地域協議会(要対協)の設置以前から地域の中で活動している団体による連絡会があり、児童虐待防止法で要対協の設置が義務付けになった時に、そのまま要対協に移行しています。要対協のメンバーは、学校・幼稚園・保育園・警察・行政機関・医療・

は、学校や家以外で信頼できる大人に見守られながら過ごすことができ、居場所となつていきます。こうした居場所が地域の中にあることで子どもの育ちを保障し、保護者の子育て支援にもつながります。子どもの権利を守り、制度に子どもを合わせるのではなく、子どもにのちを真ん中に置いた制度にしていききたいとの荘保さんの話に、元気をいただきました。

釜ヶ崎フィールドワーク

労働者の街でもあり様々な困難を抱える人が多く暮らす釜ヶ崎は誰でも受け入れるまち、お互いに助け合うまち、多様性のあるまちとして学びの場になっています



公園では毎日炊き出しがあります



介護施設 夢の里 労働者は高齢化し簡易宿所は老人ホームへと建て替わっています



水野阿修羅さんの案内で釜ヶ崎のまち歩きをしました

マップはNPO法人ココルームより



西成警察署の隣りにこどもの里があります



あいりんシェルター 求職する日雇労働者に向けて、緊急・一時的に宿泊場所とシャワーを無料で提供

高齢者の外出支援策充実を

視点

浜田 順子

(ネット伊勢原)

ブレーキとアクセルの踏み間違いによる高齢者の交通事故報道が相次いでいます。警察は免許証の更新時に認知症・運転技能検査の実施や運転免許証の返納を呼びかけてはいますが、自主返納を促すだけでは限界があります。高齢世帯が増えており、家族の援助が得られない場合、通院や買い物などへの車の運転は、生活を維持するために避けられない状況があり、対策が必要です。

私は10年前からNPOの外出支援サービスメンバーとして活動しています。伊勢原市内には福祉有償運送が5団体ありますが、当団体の課題としては、運転メンバーが少なく、ニーズに添えるのにギリギリの状況です。秦野市では、毎年2回、受講料無料で認定ドライバーの養成研修を実施し、修了者は各事業所のドライバーになったり、ボランティア団体を立ち上げています。しかし、小規模団体が多く、車両の維持費や駐車場代などの捻出に苦慮しています。

今後、確実にニーズが増えると思われる福祉有償運送を充実させる必要があります。地域の生活課題は、行政の施策の充実とともに、市民が積極的に関わることで地域の安心感が醸成され、さらなる課題解決の糸口にもつながります。